

占領下の日本における家庭科教育の成立と展開 (XXII)

— モード・ウィリアムソンの日本日記から —

柴 静 子

(2008年10月2日受理)

The Establishment and Development of Homemaking Education
in Japan under the Occupation (XXII)
— Maude Williamson's Diary from Japan —

Shizuko Shiba

Abstract: This report clears the emotion and motivation of Maude Williamson toward the establishment and development of homemaking education in Japan under the occupation. Japan Diary written by her was found as a valuable record to research new construction of homemaking education. By the analysis of Williamson's Diary from Japan, TDY Records and other documents, the results were as follows: 1) To understand the contents of the Japan Diary of Williamson, it is necessary to reveal both what Williamson did and her experimental view regarding Japanese society and women's status in Japan. The diary includes details about what she experienced. 2) Williamson made efforts in the field of home economic education because she felt that the Japanese feudalistic livelihood and ways of thinking could be changed by homemaking education. The exchanges between many excellent Japanese people including Miss Ukawa as a interpreter and they had an influence Williamson's thought.

Key words: M.Williamson, Japan Diary, TDY Report, homemaking education

キーワード: M.ウィリアムソン, 日本日記, 地方出張報告書, 家庭科教育

はじめに

戦後60余年を経た今日、占領下日本において、国民の生活改善を第一の目的として成立した高等学校家庭科教育に関して、事実を掘り起こし、記録にとどめて継承することは、この教育の普遍的な価値を検討するうえで不可避である。筆者はこれまで、GHQ/SCAP（連合国軍最高司令官総司令部）のCIE（Civil Information and Education Section：民間情報教育局）の会議録、週間報告、出張報告並びに日本側史料を収集し、分析することによって、この課題にアプローチしてきた。

その結果、CIEの家庭科教育政策の内容とこれに対する日本側の対応に関する多くの公的事実を把握することができた。しかし、CIEの係官として来日したア

メリカの家政学者たちが、新しい家庭科教育の形成と進展のために、どのような日々を送ったのか、その中で、日本の変わり行く家族生活や女性に対して何を感じ、また何を援助すべきであると考えたのかなど、改革への熱意を内側から呼び起こす心情的な部分については捉えようもなかった。

歴史的な瞬間に直面した人々の内面を知るためには、ライフドキュメントとしての口述記録、手紙、日記、写真、記録映画等の出現と分析が有効であると思われるが、いずれも極めて入手しがたいものである。幸い、今回の研究においては、総司令部で通訳を務めた宇川和子氏（1911- ）の格別の協力を得て、1949年7月に来日し、1951年6月に帰国したCIE家政教育担当官モード・ウィリアムソン（Maude Williamson:

1885-1969)の約2年にわたる日記を入手することができた。

ウィリアムソンは、昭和二十四年度版高等学校家庭科の学習指導要領の作成指導を行い、またホームプロジェクトとユニットキッチンの導入を推奨するなど、今日の家庭科教育発展の基礎を築いたルイス(Dora S. Lewis)の後任として来日した。日本におけるウィリアムソンの影響は、家庭科教育の全国的なリーダー養成から、地方におけるホームプロジェクト実験学校の実地指導に至るまで、占領期家庭科教育行政の全方面に及んでいた。

宇川氏の回想によれば、ウィリアムソンは、日記の形で書いた滞在記録を21回に渡って勤務大学の同僚に送り¹⁾、完結後は出版を希望したという。この背景には、戦後日本の教育改革や生活改善の進展状況、さらにはCIEの係官としての職務の一端について、広く米国民に知らせ、理解を得たいと考えたこと、それとともに、敗戦国の教育復興という大事業に際して家庭科教育の振興という側面から携わるといふ希有の体験を米国の家政学関係者と分かち合いたい、という思いが存在していたようである。

ウィリアムソンの日記には、CIEでの職務内容に関わる事項はもちろんのこと、日本各地に旅行をした際の出来事や感想などの記述に多くが割かれている。従って、これらについて概略を把握しておかないと日記の内容が解釈できないということになる。そこで本稿においては、まず、ウィリアムソンの経歴とCIE家庭科担当官としての職務について、地方出張も加えて紹介し、日記を解釈する際の前提条件とする。次いで日記の内容を分析することによって、ウィリアムソンをして敗戦国の高等学校家庭科教育の形成と発展に駆り立てたものは一体何であったのか、という疑問に迫りたい。

なお研究方法は、占領期の日米の関連文書を使用した文献研究である。

I ウィリアムソンの経歴と職務

1 ウィリアムソンの経歴

ウィリアムソンは、1885年にイリノイ州ロッジ(Lodge)で生まれた。幼少の頃からイリノイ州で教育を受け、1909年にはイリノイ大学で学士号を得た。その後1920年には、コロンビア大学から修士号を授与された。大学院修了後は、イリノイ州の高校とカレッジで教職に就いていたが、1926年にコロラド農工大学に招聘された。ここで退職までの26年間を過ごし、こ

の間の1942年にはスタンフォード大学から教育学博士号を授与された。論文のテーマは「1819年から1919年までの家庭科教育の発展(The Evolution of Home-making Education 1819-1919)」というもので、家庭科的教科の発生からスミスヒューズ法の成立までを対象とした教科の発展史研究であった。

コロラド大学におけるウィリアムソンの功績の一つは、全米に影響を与えた家庭科教員養成の改革だが、もう一つは家政教育のリーダー養成で、1930年代から50年代にかけて多くの人材を育成し、大学や州機関に送った。CIEの家政教育担当職員として来日したのは1949年7月24日のことであり、それから約2年に渡り、高等学校を中心として新しい家庭科教育の形成と発展に尽力し、1951年6月に任務を終えて帰国した²⁾。

2 CIEでの職務の概要

CIEにおけるウィリアムソン職務内容は、同局教育課の「会議録(Conference Report)」、「週間報告(Weekly Report)」および「出張報告(TDY Report)」に記されている。これらには、中・高等学校の家庭科や大学の家政科の教育課程の編成を指導したり、IFELや中等教育研究会に代表される教師の再教育計画を立案・実行したこと、また生活改良普及員の指導者講習を計画し、講師として参加して、農村の生活改善へ向けて人材育成の援助をしたことなどが示されている。中でも高校家庭科のホーム・プロジェクトを進展させること、および学校家庭クラブの振興に向けての指導は大きな仕事であった。

ウィリアムソンは、新しい家庭科の目標を家庭生活の改善においており、これに直接貢献するものとして、調理実習室にユニットキッチンを用意するように指導をした。ユニットキッチンは、高校生のみならず地域の主婦に対して、台所仕事を能率的なものに改善する方法を実際に示す、という目的をもっていた。

また、衣生活においては、既製の洋裁型紙を家庭科に導入することを計画し、約12,000人の女子生徒の身体計測を実施し、便利な既製型紙を文部省の型紙委員会に制作させた。

この他、日本家政学会のあり方に関する提言と指導、『明るい家庭生活』と題されたホーム・プロジェクト映画の制作指導、ナショナルリーダーのアメリカ視察計画の立案と援助、文部省の実験学校や地方の中心校における新しい家庭科の実地指導など、職務内容は多岐に渡っていた。これらはいずれも、その後の家庭科教育の発展に大きく寄与した³⁾。

3 地方出張の意義と実際

以上に記したウィリアムソンの職務は、東京のCIE事務所及びその近郊で実施されたのみならず、地方出張を通して遂行された。

CIE教育課の職員の活動として地方出張が不可欠とされた根拠について、課長補佐のJ.C.トレーナー(Joseph C.Trainor)は、次のように述べている。

東京は本当の意味において日本の首都であり、文部省への集中力からして教育の中心地であった。しかしながら、教育の地方分権化は、地方における教育活動に新しい重要な地位をもたらした。その結果、教育課職員が東京を離れて日本各地を旅行して、教育関係者と接触したり、教育に関する会議に出席する必要が出てきた。また、地方軍政部の教育担当官の中には、責任の重圧に押しつぶされそうになっている者や訓練・経験が十分でない者がおり、彼らは、自分たちが当面している問題に関して援助を得るために、しばしば教育課職員の訪問を要求した。さらには、現場でのチェックによってのみ調査可能な問題が持ち上がることもあり、このための旅行も準備された。占領期の全ての月に、教育課職員の何人かは東京から離れて、地方において関連の教育問題に没頭し、以前にも増して日本の教育問題の本質的理解を得て帰京した。そして、相変わずのデスクワークに就いた。占領が長引くに従って、旅行の通常理由は、日本人によって計画された地域・県別の教育関係の会議に出席するためとなった。(中略)職務上、日本各地を旅行したことで、自分自身が非常に教育されたというのが、東京のCIE教育課で働いていたアメリカ人教育者の共通でかつ生き生きとした経験であった⁴⁾。

トレーナーの言葉の通り、一般的には、以上のような必要性と意義をもった地方出張であったが、ウィリアムソンの場合はどうであったのか。

表1は、ウィリアムソンの地方出張のリストであり、CIE局長宛に提出された出張報告書から作成した⁵⁾。同報告書は、22の地方出張を含んでいるため、出張日の古いものから順に並べて、便宜上、資料番号を付した。また出張日は、東京出発から帰京日までとした。

さて、表1から分かるように、出張報告書に記された旅行目的は、次の8点に集約できる。

1点目は、1949年10月10日から12月23日に渡って京都大学で開催されていた第3期IFEL「中・高等学校指導主事特設ワークショップ家庭科」での指導助言のための旅行である。〔表の(5)(7)(9)〕

2点目は、「中等教育研究集会」での指導助言のた

めの旅行である。〔表の(1)(2)(4)(5)(7)(8)(12)(13)(15)(17)(18)〕

3点目は、県レベルの家庭科研究会やホーム・プロジェクト及び学校家庭クラブの発表会への出席であり、千葉県の佐原女子高校(1949年9月13日)、岩手県の盛岡高校(同年11月10日)、新潟県の三條東高校(1950年4月28日)、神奈川県の小田原城内高校(同年9月12日)の4校に向向いている。〔表の(3)(6)(11)(16)〕

4点目は、家庭科の指導主事や教師の会議に出席することで、新潟市で開催された2回の会議、四国四県の教師が参集した会議、静岡及び沖縄での同様の会議に向向いている。〔表の(2)(11)(19)(20)(21)〕

5点目は、家庭科研究指定校(実験学校)の代表者会議に出席することで、1950年6月から7月には、宇都宮市、弘前市、山形市で持たれた会合に列席している。〔表の(12)(13)(15)〕

6点目は、1950年度の「中等教育研究集会」に合わせて開催された「教育養成を主とする大学学部の家教科担当教官の集会」への出席である。〔表の(12)(13)(15)(17)(18)(19)〕

7点目は、大学における家庭科教員養成計画に関する指導助言を行うこと及び大学管理者の会議に出席することであった。〔表の(9)(10)(11)(14)(17)(19)(22)〕

最後の目的は、当時、日本の8地区に設置され、CIEの手足の役割を果たしていた民事局(Civil Affairs)の教育担当官との会議に出席することであった。〔表(4)(6)(21)〕

以上の出張報告書の記載事項から推定すると、ウィリアムソンの日本滞在日数のうち、約30%が地方出張に充てられていた。地方では、家庭科教育実践に直接的に関与している人物のみならず、広く教育委員会職員や高等学校長と接触した。その理由の一つは、家庭生活の改善と民主化に寄与する家庭科が学校教育の中にしっかりと定着するためには、都道府県の教育行政担当者や学校現場を管理する立場にある人間への啓蒙と彼らからの支援が不可欠であると考えたからである。

このようにウィリアムソンが地方出張の機会を得て、家庭科発展の基盤となる諸条件の整備を試みたことは、この教科の進展の速度を増加させるとともに、学校の管理職を巻き込んだ発展と、学校現場・県教育委員会・地元大学の三者の連携による発展という家庭科教育に色濃く現れた発展形態の端緒となったと考えることができる。

以上のように、東京及びその近郊並びに地方におけ

表1 ウィリアムソンの出張報告書の概要

| 資料番号 | 出張日 | 報告のタイトル (訪問地) | 報告書に記されている出張目的 |
|------|----------------------|--|---|
| (1) | (1949年) 7/30～8/8 | 札幌の視察旅行報告 (札幌市) | 北海道・東北地区中等教育研究会(‘49 8/1～8/6)に参加 |
| (2) | 8/22～9/2 | 新潟県の視察旅行報告 (新潟市) | 東北・北陸地区中等教育研究会(‘49 8/24～8/29)に参加, 家庭科指導主事, 教師との会議に参加 |
| (3) | 9/13 | 千葉県の視察旅行報告(佐原市) | 佐原女子高校の家庭科視察, 日本の家庭の状況調査 |
| (4) | 10/3～10/11 | 滋賀県大津の視察旅行報告 (大津市) | 近畿地区中等教育研究会(‘49 10/3～10/8)に参加, 民事局の Evans 大佐と会談 |
| (5) | 10/13～10/26 | 10月17日～22日までの広島における 中等教育研究会旅行(広島市) | 中国地区中等教育研究会(‘49 10/17～10/22)に参加, 第3期 IFEL(於:京都大学)の指導(10/14, 15と10/24, 25) |
| (6) | 11/7～11/11 | 盛岡の視察旅行報告(盛岡市) | 家庭科教育を向上させるための研究会に参加(盛岡高校) |
| (7) | 11/12～11/25 | 高松と京都の視察旅行報告 (高松市・京都市) | 四国地区中東教育研究会(‘49 11/14～11/19)に参加, 第3期 IFEL(於:京都大学)の指導(‘49 11/21, 22, 24 推定) |
| (8) | 12/2～12/10 | 大分県の視察旅行報告(別府市) | 九州地区中等教育研究会(‘49 12/5～12/10)に参加 |
| (9) | 12/12～12/20 | 京都の視察旅行報告 (京都市) | 第3期 IFEL(於:京都大学)の指導(12/13～17, 19), 大阪市立大学家庭科教員養成プログラムに関する意見交換 |
| (10) | (1950年) 3/27～4/4 | 京都の視察旅行報告 (京都市) | 京都大学での IFEL の指導助言, 家庭科教員養成に関する助言(同志社女子大, 京都学芸大) |
| (11) | 4/27～4/30 | 新潟の視察旅行報告 (新潟市・三條市) | 三條高校における家庭科研究会に参加, 新潟県家庭科教師会議, 新潟県 婦人会議, 新潟大学家庭科教員養成計画についての協議に参加 |
| (12) | 6/6～6/19 | 宇都宮, 仙台, 盛岡, 花巻旅行報告 (宇都宮, 仙台, 盛岡, 花巻市) | 関東地区中等教育研究会(‘50 6/7～6/13)に参加, 研究指定校の指導 者との会談, 大学家政科担当教官の会議, 生活改良普及員の会議に参加 |
| (13) | 6/26～7/4 | 青森の視察旅行報告 (弘前市) | 北海道・東海地区中等教育研究会(‘50 6/29～7/4)に参加, 研究指定校の校長との会談, 大学家政科担当教官の会議に参加(7/2) |
| (14) | 7/7～7/15 | 大阪府, 奈良市の視察旅行報告 | 奈良女子大学における教員養成計画の研究協議に参加 |
| (15) | 7/17～7/25 | 山形の視察旅行報告 (山形市) | 東北・北陸地区中等教育研究会(‘50 7/19～7/25) 参加, 研究指定校の代表者と会談, 東北地区大学家政科担当教官の会議に参加 |
| (16) | 9/12 | 小田原の視察旅行報告(小田原市) | 小田原城内高校の家庭科プログラムに関する協議に参加 |
| (17) | 10/11～10/18 | 大阪, 神戸の視察旅行報告 (大阪市, 神戸市) | 近畿地区中等教育研究会(‘50 10/11～10/17(に) 参加, 大学家政科担当 教官の会議に参加(10/15), 奈良女子大学管理者との会合 |
| (18) | 11/7～11/14 | 岐阜の視察旅行報告 (岐阜市) | 東海・北陸地区中等教育研究会(‘50 11/8～11/14) 参加, 大学家政科担当教官の会議に参加(11/12) |
| (19) | 12/9～12/23 | 四国視察旅行報告 (四国四県) | 四国四県の家庭科教師の会議, 大学家政科担当教官の会議, 大学管理者の会議に参加 |
| (20) | (1951年) 1/23～1/27 | 静岡の視察旅行報告 (静岡市, 磐田市) | 静岡県の高校長と家庭科教師の会合に参加 |
| (21) | 3/18～4/1 | 沖縄の視察旅行報告 (沖縄) | 沖縄の家庭および学校の調査, 家庭科教師との会合に参加, 民事局職員との会合 |
| (22) | 5/3～5/10 | 大阪, 奈良, 京都の視察旅行報告 (大阪市, 奈良市, 京都市, 和歌山市) | 奈良女子大学教職員との協議, 大阪・京都地区の私立大学のワークショップに参加 |

(Report-TDY, GHQ/SCAP, CIE Records, Box no.5757から著作作成)

るウィリアムソンの教育活動を把握することができた。これを前提にして日記を分析するが、何分内容が多岐に渡っているため、今回の研究ではこれまで知られていなかった来日の前後の状況や心情、日本人の生活や女性の地位への見解、ホーム・プロジェクトと学校家庭クラブの振興に向けての活動、そして全幅の信頼を寄せた通訳の宇川和子氏との交流という4つに視点を絞りたい。なお、表2に日記の抜粋をあげているので参照されたい。

II ウィリアムソンの日本日記

1 コロラドを出発して東京に到着した当初の日記

ウィリアムソンの日記は、1949年7月13日に始まり、1951年5月14日に終わっている。来日は7月24日であるので、その11日前、友人に見送られてコロラド州のラサールの駅を出発した時から書き始められている。この頃の日記には、コロラドの美しい風景と温かい人々を後にして、なぜ自分がこのような冒険に足を踏み入れたのかを自問しながらも、これが大きな仕事になり、日本の将来に影響を与えるに違いないと予感したことが記されている。

ウィリアムソンが家政教育専門家として招聘されることになったのは、新制高等学校の新しい教科である家庭科の充実のために、CIE教育課の職業教育担当のI.ネルソン (Ivan Nelson) らが来日を画策したことに端を発していた。CIEでの仕事を成し遂げるべくウィリアムソンは、サンフランシスコ、ハワイ、グアム島を経由して、7月24日に戦後復興中の東京に到着した。宿舎としては、GHQ職員専用として接収していた第1ホテルの7階南向きの一室が用意されていた。

ウィリアムソンの日記には、来日の翌日、すなわち7月25日には、CIEの事務所が入っている日本放送会館に向かい、ネルソン (Ivan Nelson) に挨拶をした後、彼の家に招かれて昼食をとったこと、8月の第1週目には北海道の中等教育研究会に参加することを告げられたこと、26日には、宿舎で休息をとったり、窓から見える雑多な人々や珍しい風景を興味深く観察したことなどが記されている。

翌27日はネルソンに連れられて、お茶の水女子大学の家政科の会議に出席して、教官たち及び通訳である宇川和子さんを紹介されたこと、彼女は立派な女性で、通勤時間が片道1時間以上かかる遠隔地から、毎日通ってきていることなどが記されている。当初、ウィリアムソンは、日本人一般を表現するのに、ジャップ

という言葉を使っているが、英語が堪能で、元海軍中將を父にもつ宇川さんに対しては、親しみと敬愛の念をもって接し、また頼りにしていたようである。27日の日記の続きには、文部省の実験学校であるお茶の水女子大学附属高校を視察したが、ユニットキッチンを除いては家庭科の設備は極めて悪いと記し、混乱した日本においては、アメリカはほんの少しの文化をもたらしているだけだ、と嘆いている。

翌28日はCIEで資料分析を行い、29日にはCIE事務所にネルソンを訪ねてきた2人の家庭科教師と会って、「家族関係」の本を寄贈された、と書かれている。この本は、恐らく「昭和二十四年度学習指導要領家庭科編高等学校用」の参考書として出版された『家族関係の解説』(幸坂佐登子著、有隣書房、1949)と思われる⁶⁾が、ウィリアムソンは、本の内容は低級で、遺伝が成長と性格を規定するなど書いていると記して、教師用図書の改善と適切な出版物の必要性を感じている。

このように、来日からわずか1週間に、ウィリアムソンの2年間の職務上の課題のいくつかが既に出現していたことが分かる。これ以降、公的な報告書には見られない多くの出来事やその都度の感情が日記には記されている。

2 日本人の生活や女性の地位について

例えば、1949年8月10日の日記には、日本は社会革命の最中であり、教育制度、労働形態、女性の地位、服装、言語などすべてが変わりつつある、と記されている。また、8月29日の日記には、新潟県で開催された家庭科指導主事と教師の集会に出席し、新憲法の制定や民法の改正によって、日本の女性の法律上の地位は向上したが、女性蔑視の社会通念は何ら解消されていないと述べ、さらにアメリカでは地位向上は女性たちが勝ち取ったものであると話した、と書かれている。

日記全般を通して、日本の女性たちの未熟だが前進する姿を見守り、常に援助できることはないかと考えていたウィリアムソンの姿を見ることが出来る。だが同時に、前近代的な家庭生活の現状とそれを形成している人々の意識や習慣に対しては、冷静でやや批判的な目が向けられていた。なぜならば、家庭生活や女性の地位に見られる日本社会の前近代的所産を、家庭科教育を通してより民主的なものへと変革することを自らの使命と心得ていたからである。ウィリアムソンの目には、日本社会の幾つかの側面が次のように映った。

表2 ウィリアムソンの日本日記（抜粋）

(1949年)

-7月-

13~26日：コロラドを出発して、東京に到着。CIEでネルソンに会い、今後の予定等を知らされる。日本の風景や人々の姿が珍しい。宿舎である第1ホテルから見える風景は興味深いものだ。私の印象、それはとても変わった島にいることである。

27日：お茶の水女子大学での家政学会議に出席。附属高校の施設を見る。設備は整っておらず、アメリカの標準以下である。

29日：家族関係の本を持参した家庭科教師と会う。内容はよくない。CIEのホーリングシェッドと食事をし、親交を深めた。

31日：北海道での中等教育研究会に参加するため列車で東京を出発した。東北地方の美しい景色が目を楽しませてくれる。

-8月-

2日：昨日は札幌女子高等学校で家族関係やFHAの話をした。でも日本人は本当に家庭クラブのことを理解しているのだろうか。

3日：札幌の銀座通りを通して研究会に向かった。女子高校生の衣服更生のホームプロジェクトはよくできていた。宇川さんと話をし、日本の女性の地位の低さを実感した。法律はできたが、現実の女性は夫の家で支配されたまま暮らしている。

6日：多くの人に見送られて北海道を去った。素晴らしい見送りに感激をした。私はこの旅行と日本人に感謝を感じ始めている。

8~12日：15日に開催される東京学芸大学での家政科教師の会議の準備をする。9日にはCIEのポールズと会った。彼女は車を持っているので、皇居から明治神宮までをドライブし、たくさんの小さな家とその貧しさを目にした。

15日：東京学芸大学で開催された家庭科教官の会議で、大学の家政科カリキュラムについて話した。CIEのカーレーも講話をした。

23日：東北・北陸地区中等教育研究会のために、夜行列車で新潟に向かった。早朝6時、東北民政管区のメイヤーが迎えてくれた。

24日：この集会参加者数は約400人。家族関係について講話をした。そのなかで、男性も家庭を楽しみ、家族を手助けすることの意義を説いた。もしかすると、男女が家庭科を学ぶことが日本の家族の将来に役立つのではないかと思った。

29日：昨夜は、女性リーダー会議に出席した。彼女らは女性教師の地位に関心をもっており、男性と同等の地位を得るためには、男性と一緒に働き、男性以上に仕事をこなす必要があるなどと話した。日本社会の女性の地位は本当に低い。法律によって地位を与えられてはいるものの、社会習慣からは与えられていない。メイヤーが私のためにたくさんの果物を用意してくれた。

-9月-

1日：新潟から東京に出発したのだが、台風のため足止めされ、ホテルで静かに過ごした。大変疲れた旅であったので助かった。

2日：東京に到着。会議があったり、留守中に溜まっていた手紙を読んだり、一日中事務所で忙しく仕事をした。

13日：山本キクさん、宇川さん、ドロシィーと千葉へ行った。佐原女子高等学校への訪問である。アメリカの家族関係や学校家庭クラブについて話をした。その後、作り酒屋や養蚕農家に案内されて、生活ぶりを見せてもらった。蚕は家族同様になっている。気味が悪いものではなく、繭になり、熱湯に入れられて糸が引き出され、糸車に美しい絹糸が巻きつけられるのだ。

17日：CIEのポールズと一緒に、愛知県で行われる東海・北陸地区中等教育研究会のために東京を車で出発した。道中、箱根峠の景色は美しく、まるでコロラドのようであった。初めて見た富士山は、夕方の青と紫の光の中で際だっていて圧倒された。今も思い出風景である。

20日：研究会の午前の部は、中学校の家庭科教師との会合であった。アメリカでは、男女ともに家庭科を学んでいるのかどうか、質問が出された。私は、新憲法が制定され、今後、日本の家族は変わっていくであろう。それゆえ、これからの日本においては男女が家庭科を学ぶべきだと述べた。午後の部では、家族関係とホームプロジェクトについて話した。

30日：某女子高校を訪問し、ホームプロジェクトの授業を参観した。生徒の前で、アメリカの学校との違いについて話をした。

-10月-

8日：京都で奈良女子大学の波多腰 ヤスさんと会った。彼女はすばらしい講義をしていた。街に出て、古い錦織の店に立ち寄った。絹の品々は美しすぎて言い表すことができないほどであった。

14日：京都大学でのIFELに出席した。およそ200人が退屈な講義を受けていた。全員がノートをとっていたが、宇川さんと話した私には言葉が理解できなかった。この中に女性はほとんどおらず、家庭科のグループがどこにいるのかも分からなかった。

15日：IFELに参加している家庭科教師を指導して、話し合いの技術を習得させることが大切だと思った。

16日：広島で開催される中国地区中等教育研究会に参加するため、京都を出発して呉に向かった。電車から降りると、海に浮かぶたくさんの島々が見え、私が今まで見たどこよりも美しい風景が目に入ってきた。

20日：高等教育や家庭科教育のあり方について、関係者と話し合った。私が食物の話をしないので校長がいぶかしがったが、食糧が何もかも不足している状態では何ができるというのだろうか。

22日：研究会が終わったのでポールズと宮島に観光に行った。赤い大鳥居は満潮の時は水上にある。とても楽しい一日だった。

30日：大学の家政科の教官たちと会合もあった。教師教育の必要は大いにあるのだが、何もなされていない。教師教育者はおらず教師教育の方法について書かれた本もない状態だ。そのため、先頃改訂されたライルと共著の私の本（「Homemaking Education in the High School」）を翻訳して、出版せねばならないと思う。

—11月—

3日：新潟県新発田市で、300人の女性教師を前に講演をした。これらの人々は、アメリカの女性は自分たちが欲するものを全て達成してきたと考えている。そこで私は、アメリカでの長い努力と、達成したこととできなかったこと、そしてどのように人々が達成したのかということについて、話をした。独自の考えをもつこととリーダーを評価することの大切さを強調した。

9日：昨日は盛岡に向けての列車に乗った。宇川さんは客車で私は寝台車に別れた。少し眠った後、ボーイが彼女からのメモをもって来た。「私は客車2に移りました。それはあなたの何台か前の車両です。私は、ボーイにあなたが心配するといけないので、これを届けてもらいます。あなたの“影”は朝になればあなたのもとに戻ります。」盛岡では、大きな農家に立ち寄り、生活の様子を見せてもらった。主人はアメリカの農業の様子を知りたがった。私は、アメリカでは馬小屋は家から離れていて、水が出しっ放しであることなどを話した。

10日：盛岡高等学校でホームプロジェクトの授業を参観した。夕食のすきやきはとてもおいしく、アメリカ人が最も好むものだ。

14日：四国地区中等教育研究会参加のために高松に着いた。職業教育部会では文部省中等教育課長の太田周夫氏がアメリカの職業教育について語り、訪問したケンタッキー州の家庭科ホームプロジェクトについて話した。彼は強い印象を受けたようだ。

21日：京都大学で近畿地方の500人の家庭科教師に話をした。美しい人形をプレゼントしてくれたが、芸者か姫か、どちらだろう。(1950年)

—3月—

3日：今日は女の子の日(ひな祭り)である。都立第四女子高等学校の家庭クラブから招待された。500人のメンバーが集まっていた。歌と踊りの後、若い女の子のような着物と帯の衣裳を着せられた。とても素晴らしい着物を着た生徒たちもいて、ステージで一緒に写真を撮った。宇川さんは、彼女たちは着物をあまり着ないので、上手な着方を知らないといった。

—8月—

12日：私の本が宇川さんの翻訳で出版された。装丁も良好で、印象がとてもよい。1冊はアメリカに送られる予定である。この1年間、私の仕事は発展した。CIEに提出した報告書は、教育課長から、楽観的ではあるが最も褒めるに足るもので、素晴らしいとお褒めのことばをいただいた。

14日：型紙プロジェクトの委員会が開かれた。たくさんの採寸をし、4つの基本的な型紙を作成する予定である。

—9月—

5日：宇川さんはイニシアティブを発揮させ、もはや彼女のアイデアを私に教えるのをためらうことはなくなった。彼女は毎朝、われわれがほしいと思うアイデアの表をもって来た。彼女は、教科書ではなく一般の雑誌に家庭科教育についての記事を書きたいと言った。私はそうしなさいと促した。彼女ならきっとできるだろう。

7日：苦しくも楽しかった日だった。人形の日に、女子生徒たちが自作の着物を私に着せた。私は、彼女らに型紙を試しに使うことを勧めた。家庭クラブ員と話し合った。

—10月—

2日：何日間かかけて第2次教育使節団報告書(Educational Mission Report)を丁寧に読んだ。使節団は、占領が引き起こした家庭生活の社会的な変化について、変化の骨格だけは見ているが、変化の中身については全く示唆を与えていない。

(1951年)

—4月—

5日：婦人部隊に日本の生活について話した後、女子高校生がホームプロジェクトを実施して、台所を改善している映画「明るい家庭生活」を見せた。だが、何の質問もなかった。映画の中の日本人はとてもよいことをしているのに。

24日：宇川さんは5月14日のアメリカへの出発の準備をしている。私はこの前の日曜日に彼女の家に行き、洋服や旅行計画の下調べをした。私は、着物を洋服に作り直すことを提案した。私たちは火鉢の上でそれぞれが料理をしたものを食べた。それはとても面白く、友好的で穏やかなものであった。

—5月—

14日：私は一つの時代が終わったのを感じた。私の“影”は、本日午後、アメリカへと旅立って行った。初めて出会ったときは、帽子を被って黒いスーツで、バリから着いたように見えたのに。栈橋には父親も見送りに来ていた。彼はいつも笑顔であったが、誰にも見られていない時には、誠実、喜び、悲しみのすべてを結合した顔をしていた。出発のとき、宇川さんは見送りの我々に届くように上手にリボンを投げた。私は6月に帰国する予定であるが、進行中の仕事が残されている。教員養成モデル大学の件と指導主事のIFELである。軍隊式ではなく一緒に仕事をやり遂げるこそ民主主義を根付かせる方法なのだ。

① 家庭と家族関係について

日本の家庭は変わりつつある。家事を家族で行っている家庭もあればお手伝いを雇っている家庭もある。お手伝いを雇っていない都市部の家庭は大部分が非常に質素であるかもしくは貧しいように見える。女性は育児をしつつ、それに加えて会社勤めの夫の世話をしながら家事の全てを行っている。さらに家庭の外で働いてさえいる。農家においては家族の一員として男子に混じって田畑で厳しい肉体労働をしている。

家には多くの子どもがおり、手引き書なしに育てられている。2、3歳になるまで子どもはおぶって育てられる。生後2年間で個人のパーソナリティが形成されるという理論が真実だとすれば、この赤ん坊をおぶって育てるということは、日本人の受け身的で積極性に欠ける、という特性の原因となっているようである。

子どもと母親の関係は非常に密である。年長の子どもの年下の子どものめんどうを見る。過去においては男子は支配的な役割を演じていた。長男が他の誰よりも優先された。妻が夫と一緒にどこかに出かけることはめったになかった。婚外関係は受け入れられていた。祖父母と年寄りはいつも子どもの世話を受け、尊敬もされていた。結婚は仲人を仲介して家族によってお膳立てされた。若者は小学校を出た後は異性と社会的関係を持つことはめったになかった。

状況は変わりつつある。女性は男性と同等の法的権利を得た。長男は特権を失った。離婚は増えつつある。若者は男女共学の中等学校に通うようになった。都市部においては男女互いに社会的な関係を持ちつつある。ある領域において、人々は急激な変化に戸惑っている。そのほかの領域においては古い封建的な習慣が依然として残っている。家族関係の様式は変わりつつあるが、状況は混乱している。

② 食事について

日本人はバランスの取れていない食事をしている。それは一つに不十分な食糧供給からであり、もう一つは伝統的な考え方や習慣のためである。一つの季節から他の季節にかけての食物の保存は多くは漬物である。米ぬかが漬物に使われる。栄養学の立場から見れば最も欠乏しているものは牛乳である。どこでも見られる歯の良くない状態はこのような食事上の欠乏の現れである。

③ 労働について

驚くべきほどの労働力が日本では生活のために使われている。家事労働を少なくするための工夫は目に余

るほどなされていない。日本で女性に腰痛持ちかどうかを尋ねると、例外なくならずくであろう。労力を節約するために家庭を改善するという考え方や、簡単な方法で物事を処理する方法を学ぶという考え方を示すと驚かれる。アメリカ合衆国においてなされているように、家事労働を省力化するためにお金を払うという、時間とエネルギーの節約精神はない。日本人は、貧しいからという言い訳をいつもするが、アメリカ合衆国では非常に貧しい人でも洗濯機を所有している。

④ 家屋について

家屋は単純でものが占領しているという状況からは比較的程遠い。家具を使用することは少ない。たくさんの収納スペースはあるが効果的に計画されていない。台所は状況が悪い。暗く不潔、不便で、きれいに掃除をすることが不可能である。暖房はほとんどなされていない。家族が入る風呂は役立つものである。

⑤ 衛生について

占領下で家庭の衛生状況は改善されてきている。しかし毎日の食事やハウス・ケアに関した衛生についてはほとんど意に介していない。空気、日光に絶大なる信頼がおかれ、部屋は換気がなされていて、布団を良く干す。

⑥ 衣服について

衣服に関しては二つのタイプのもので使用されている。伝統的なものと西洋式のものである。このことは高い衣服費、衣服整理や被服制作の問題を複雑にする。ある地域の調査によると、三分の一から二分の一の家庭はミシンをもっている。洗濯機は実際的にはまだ知られていない。

⑦ 健康について

健康状況は低位である。しかし占領下において次第に改良されてきている。平均余命はアメリカ合衆国よりも十歳以上短い。結核感染率は高い。多くの病気は食と水に関する悪い衛生状況のためであるというのが一般的である。病院のサービスは十分ではない。家庭看護は十分に理解されていない。

⑧ 家庭管理について

管理実務は伝統的である。これが日本のやり方だとは普通にいわれる。仕事の道筋を整えたり、動作研究や時間研究をすることはほとんど考慮されていない。商品の経済的使用は広く行き渡っている。アメリカ合衆国では価値がないとして捨てられるようなものを蓄

えておくのが一般的である。ものを長持ちさせることに配慮するのは家庭において一般的であるように見える。

⑨ 社会の習慣について

日本人は、重要なものとして引き継がれている独自の社会習慣をもっている。彼らは自分の基準に従って、非常に極めて礼儀正しく、強い義務感をもっている。加えて、ある西洋式のマナー、社会習慣、日常生活の方法を受け入れている人も多い⁷⁾。

以上のようなウィリアムソンの日本家庭の分析は、子育ての方法に関する偏見を除けば、驚くほど当を得ていたといえよう。日記には、①～⑨の視点が散見されるが、とりわけ、女性が法的には男性と平等とされたものの非合理的な家事労働からは解放されておらず、このことが日本社会の解決すべき大きな問題であると考えていたことが読みとれる。

3 ホーム・プロジェクトと学校家庭クラブの振興のために

日記には、ホームプロジェクト実践校訪問時の感想が多く記載されている。1949年8月3日の日記には、最初の訪問校である札幌女子高等学校の実践を観察して、被服のよいプロジェクトであると褒め、愛するコロラドのようだと感動している。

ウィリアムソンは、中等教育研究集會に出席した際には、文部省指定の家庭科ホーム・プロジェクトの実験校を訪問した。それのみならず、不定期に東京からさほど遠くない地方の高等学校を訪れ、新教育の精神や方法を指導した。例えば、1949年9月13日には、千葉県佐原女子高等学校を訪問したが、日記には次のように記されている。

この旅はおもしろかった。午前8時、宇川さん、文部省の山本キクさん、ドロシー・マック (Dorothy Maack) と私の4人が一台の車で千葉に向けて出発した。途中から、その他の学校視察担当者も車でやってきて、私たちと合流した。車は半島を巡り、佐原女子高等学校についた。校長、指導主事、県教育委員会職員らとお茶を飲みながら歓談した。その後、黒髪、青いスカート、白いセーラー服の女子生徒500人にアメリカの高校の話をした。彼女たちはとても興味を示した。昼食後、一時間ほど、学校家庭クラブに入っている女子生徒たちと話し合いの場をもった。彼女たちがあらかじめ用意をしていた質問をしてきたので、FHA (Future Homemakers of

America: アメリカの学校家庭クラブ) のバッジを見せたり、クラブ誌を提供するなどした。クラブ誌は英語の時間に翻訳されるであろう。また、ロッキー・フォード・クラブに手紙を書くように勧めた。彼女たちはやってくれるに違いない、私にはそのように思えた。

この後、何人かの男性が私を農家に案内してくれた。行って見て、よかったと思う。その家は、裕福な造り酒屋であり、主人の妻は青い着物を着ていて、私たちに深々とおじぎをした。酒が振る舞われたが、妻はその場にはおらず、私たちが帰る時に再び現れておじぎをした。その次の農家は茅葺き屋根の大きな家だった。25フィート平方もありそうな台所と土間があり、かまどが土間に埋められていた。いろいろが4つ設けられていて、ご飯の釜もあった。その隣の家では蚕が飼われていて、盛んに桑を食べていた。これらの虫に不思議と嫌悪感はいだかなかつたし、何よりもこの家の住人は蚕を家の一部分にしていた。蚕は、繭をつくると沸騰した湯に入れられ、糸が引かれ、糸車に巻かれて生糸となるのだ⁸⁾。

以上の佐原女子高等学校の例のように、ウィリアムソンは学校訪問指導の際に、アメリカのホーム・プロジェクトや学校家庭クラブ活動を紹介し、FHAの機関誌を与え、さらにアメリカのクラブに手紙を出すことができるように宛先を教えるなどして、生徒の実践活動に方向性を与えるのが常であった。また、そのような機会に、近隣の農家などを訪問して家屋の様子や家族関係、女性の地位について観察を深めることにより、非合理的な生活を改善することの必要性を確信した。そしてホーム・プロジェクトや学校家庭クラブ活動を通してこの問題の解決を図ることに一層深い意義を見出したのである。

4 通訳の宇川和子氏との交流

日記には通訳の宇川氏と初めて出会った時から、約2年に渡る交流が生き生きと記されている。宇川氏はウィリアムソンから「私の影」と言われたほどで、卓越した英語力、人柄のよさと熱心さで、ウィリアムソンの片腕として戦後改革という困難な仕事を助けた⁹⁾。

加えてウィリアムソンの名著である「Homemaking Education in the High School」(Appleton, 1941)¹⁰⁾を翻訳し、日本の家庭科教育の振興に大いに寄与した。1950年8月12日の日記には、「私の本が宇川さんの翻訳で出版された。装丁も良好で、印象がとても良い。一冊はアメリカに送られる予定である。」と記されており、ウィリアムソンの喜びが伝わってくるようであ

る。

いみじくも、1951年5月14日（月）付の最後の日記は、ウィリアムソンの尽力で奨学金を得て、家政学を学ぶためにオレゴン州立大学に向けて出発する宇川氏の見送りが主題であり、次のように記されている。

私は一つの時代が終わったのを感じた。私の“影”は、本日午後、アメリカへと旅立って行った。初めて出会ったときは、帽子を被って黒いスーツで、パリから着いたように見えたのに。栈橋には父親も見送りに来ていた。彼はいつも笑顔であったが、誰にも見られていない時には、誠実、喜び、悲しみのすべてを結合した顔をしていた。出発のとき、宇川さんは、見送りのわれわれに届くように、上手にリボンを投げた。

90歳を越えた宇川氏にとっても、ウィリアムソンとの思い出は、例えば地方に赴いたある時、凍えそうなプラットホームで、着ていた毛皮のコートにすっぽりと包んでくれたことなど、今も時折浮かび上がってくるような大切なものなのである¹¹⁾。

おわりに

ウィリアムソンの日記は、これまでの研究で明らかになっている CIE の公的な記録を補完すると共に、占領側、被占領側の垣根を越えて、日本の教育の再建のために尽くした人々の情熱と温かい交流が実際に存在したことを示している。ウィリアムソンと、宇川氏や文部省係官など日本側関係者との人間的な交流が、新しく誕生した高等学校家庭科教育の基盤を強化し、修正すべきところはあったものの、大筋としては行方を誤らず発展することに繋がったと考えることができる。

戦後の教育改革を家庭科教育に限定して眺めて見れば、ウィリアムソンの日記が示すとおり、異文化を持つ人間の相互理解と信頼を基底において改革は実行されたといえる。来日から半世紀以上を経ても、家庭科関係者からウィリアムソンが尊敬される所以は、このようなどころにあると思われる。

【注】

- 1) ウィリアムソンの日記はコロラド農工大学の化学学部の教授、Dr. W. E. Pyke に宛てて発送された。宇川和子氏はその控えを長年保管しており、この度の研究資料として、筆者に提供して下さった。
- 2) L. Fee, P. Mckean and E. Mulnix, Maude Williamson, “Seventy Significant Leaders”, Teacher Education Section, A.H.E.A., 1982, pp.57-62.
- 3) “337: Conference Reports, Education Division-Williamson”, GHQ/SCAP, CIE Records, Box no.5757.
- 4) J. C. Trainor, “Educational Reform in occupied Japan”, Meisei University Press, 1983, pp.381-388.
- 5) “Reports-TDY”, GHQ/SCAP, CIE Records, Box no.5757.
- 6) 幸坂佐登子著『家族関係の解説』（有隣書房1949年発行）の第5章「結婚の資格と仕度 結婚と遺産」において、該当の記述が見られる。同書の68～73ページを参照されたい。
- 7) “Analysis of homemaking education in Japan and recommendations for future development”, Homemaking Education, GHQ/SCAP, CIE Records, Box no.5762.
- 8) ウィリアムソンは日本の絹の布や着物の美しさに魅せられて、西陣織などを大量に購入したようである。そのためか養蚕農家の視察は興味深かった。
- 9) 占領期における家庭科教育の創出には、アメリカからの家庭科教育専門家の来日が大きく影響を与えた。宇川和子氏は通訳という立場を超えて、まさにウィリアムソンとともにこの役割を果たしたといえよう。家庭科教育発展史研究における宇川氏の再評価が望まれる。
- 10) この本は「中等学校における家庭科教育」と題され、1950年8月に実業之日本社から出版された。
- 11) 筆者が2003年4月に行ったインタビューの中で、宇川氏はこのようなエピソードを語り、ウィリアムソンの温情を思い起こされた。